

2者の対面的コミュニケーションにおいて 好悪感情が発言行動に及ぼす影響¹⁾

黒川光流・若林美江

問 題

人と人との対面的なコミュニケーションでは、言語あるいはその意味内容のみでメッセージが伝達されているわけではない。対人距離、体の向き、表情、視線、接触、準言語、嗅覚作用、あるいは人工物を用いて、送り手が無意識のうちにメッセージを伝達していたり、あるいは受け手が主体的にメッセージを受け取ったりしていることがある。これら言語以外を用いて行われるコミュニケーションを非言語的コミュニケーションという。

非言語的コミュニケーションには、情報提供、相互作用の確認、親密さの表出、社会的調整、およびサービスと仕事上の目標の促進という5つの機能がある (Patterson, 1983)。また、対面的なコミュニケーション場面では、非言語的チャネルによる情報の伝達量が言語的チャネルによる情報伝達量を上回ることもある (マレービアン, 1986)。

非言語的コミュニケーションでは主に、声の質、相づち、あるいは沈黙などの準言語、視線、および空間行動が用いられる (大坊, 1990; 大坊, 1995)。特に、準言語のうち発言あるいは沈黙などの発言行動は、コミュニケーションの活発さを示す指標である。

非言語的コミュニケーション行動に影響を及ぼす要因として、会話内容 (Tesser & Rosen, 1975)、会話相手の発言量 (Kendon, 1972)、あるいは会話相手との関係性などが挙げられる。会話相手との関係性の中でも、特に会話相手への好悪感情は、様々な非言語的チャネルにおけるコミュニケーションに影響を及ぼしている。例えば、好意的感情をもっている相手とは対人距離が密接になり、非好意的な特徴をもつ他者とは対人距離が大きくなる (和田, 1996)。また、相互に好意を抱いている2者間では、視線の交錯が活発になる (大坊, 1986; 1990)。

上記のように、会話相手への好悪感情と非言語的コミュニケーションとの関連を検討した研究は行われている。しかし、主に使用される非言語的チャネルである準言語、特に発言行動と好悪感情との関連を検討した研究は少ない。また、好悪感情とコミュニケーション行動との関連を検討した研究では、2者のうちの一方の好悪感情にのみ焦点を絞り、その一方の行動のみ

を分析対象とするものが多い。例えば、面接者や実験的に一定の役割を与えられた人物（サクラ）を用いるなど、あくまで2者のうちの一方のみの行動を対象としている。しかし、実際の対面的コミュニケーションにおいて、相手に対する好悪感情が一方向的に非言語的コミュニケーション行動に影響を与えるわけではない。飯塚・福原（1988）は、非言語的コミュニケーションを考えると、個人の中で同時に行われている非言語メッセージの表出と解釈の2つの側面を考慮することの重要性を指摘している。送り手が受け手にメッセージを伝える符号化、受け手がそれを読み取る符号解読が繰り返されてコミュニケーションが成立しており（和田，1997）、会話相手の態度も非言語的コミュニケーションには大きな影響を及ぼしていると考えられる。従って、コミュニケーションを行う両者の好悪感情を考慮した上で、2者間で交わされる非言語的コミュニケーション行動を検討する必要がある。

大坊（1985）は、初対面の異性間で会話を行わせ、その際、好悪感情を操作し、コミュニケーションを行う両者の好悪感情が発言行動に及ぼす影響を検討している。その研究では、会話相手に好意的感情をもった者の発言量は、好意的感情をもつ前と比較して増加していた。しかし、この増加は一時的であり、次第に元のレベルへと減退した。一方、非好意的な感情をもった者の発言量は、非好意的な感情をもつ前と比較して低下し、会話セッションを通してこの減退は回復しなかった。特に男性の発言量が低下する傾向を示した。また、初対面の男性同士を被験者として行った和田（1988）の研究では、好悪感情が発言行動に及ぼす影響は認められなかった。

しかし、これらの研究では、互いに好意的あるいは非好意的感情をもつ者同士のみを研究対象としている。また、コミュニケーション過程における発言行動の推移については十分な分析がなされていない。コミュニケーション過程を時系列的に分析することで、発言行動の差異が生じるプロセスを検討することが可能となる。

目 的

本研究では、2者による対面的な会話場面を設定し、2者間の好悪感情の相異によって、発言行動およびその推移過程に差異が見られるかを検討する。その際、互いに好意的感情あるいは非好意的感情をもつ者同士だけでなく、一方は好意的感情をもち他方は非好意的感情をもつ2者も分析対象とする。

非言語的コミュニケーションには性差が広汎に認められており（大坊，1986）、好悪感情と発言行動との関連を検討するときには被験者の性別を統制する必要がある。また、大坊（1985）および和田（1988）の研究では、女性同士のコミュニケーションを研究対象としていない。そこで、本研究では女性同士のコミュニケーションのみを研究対象とする。

好意的感情をもっている相手に対しては発言量や発語数などの発言行動は活性化する（大坊、

1986; 大坊, 1990)。このことから、好意的感情をもつ者の発言行動は促進され、非好意的感情をもつ者の発言行動は抑制されると考えられる。従って、次のような仮説が考えられる。

仮説：2者間のコミュニケーション過程では、互いに好意的感情をもつ2者、一方が好意的感情をもち他方が非好意的感情をもつ2者、互いに非好意的感情をもつ2者の順で発言行動が活発になるであろう。

上記の仮説もあわせて検証する。

方 法

被験者

女子大学生30名。1回の実験セッションで初対面の被験者2名に集まってもらい、その2名を1ペアとして実験を行った。

実験計画

2者の好悪感情の組み合わせ 2名の被験者が①互いに好意的感情をもつ条件（以下、好意－好意条件）、②一方が好意的感情をもち他方が非好意的感情をもつ条件（以下、好意－非好意条件）、および③互いに非好意的感情をもつ条件（以下、非好意－非好意条件）を設定した。各条件に5ペア10名の被験者を割り当てた。

好悪感情の操作

他者から肯定的な評価を受けた場合、その評価者を好意的に認知する傾向がある。そこで、大坊（1985）および和田（1988）を参考に、会話相手からの第一印象として偽りのフィードバックを提示することで好悪感情を操作した。まず、2名の被験者それぞれに相手の第一印象を評定用紙に記入してもらい、それらを実験者が回収した。回収した評定用紙を実験者があらかじめ肯定的あるいは否定的に評定しておいたものと入れ替え、相手からの第一印象として被験者に提示した。具体的な評定用紙の内容およびフィードバックの内容は以下の通りである。

1. Byrne（1971）の対人魅力尺度の中で得点の対象となっている「個人的な感情」、および「実験と一緒に働くこと」の2項目を用いた。いずれの項目も7段階評定である。好意をもたせる場合、いずれの項目にも肯定的な方から2つ目に○をつけた。非好意をもたせる場合、「個人的な感情」は否定的な方から3つ目、「実験と一緒に働くこと」は否定的な方から2つ目に○をつけた。

2. パーソナリティ認知の基本次元の1つである「個人的親しみやすさ」の中から「明るい－暗い」、「ユーモアのある－ユーモアのない」、「親しみやすい－親しみにくい」、「感じの良い－

感じの悪い」,「親切な－不親切な」, および「心の広い－心の狭い」の6項目を用いた。いずれの項目も7段階評定である。好意をもたせる場合は, 6項目のうち, 1項目は中点, 他はすべて肯定方向に○をつけた。非好意をもたせる場合, 6項目のうち1つは中点, 他はすべて否定方向に○をつけた。

会話内容

大坊(1977)の, 話題に対する重要度に関する調査の中から, どのような被験者でも話しやすいと思われる「食べ物の好き嫌いについて」を話題として選んだ。

手続き

1. 実験者1名と被験者2名が同時に実験室に入室した。その際, 被験者には「見ず知らずの2人がある話題について話すときに, どのように話を進めていくのかをビデオで撮影して調査する」ことが告げられた。

2. 被験者2名は互いに姿の見えない場所で相手の第一印象を評定用紙に記入した。実験者はそれらを回収し, あらかじめ肯定的あるいは否定的に評定しておいたものを, 互いがもった印象としてそれぞれの被験者に提示した(好悪感情の操作)。

3. 被験者同士を向かい合って着席させ, 「今から私は退室しますので, 私が呼びに来るまでの15分間, お2人で話をしてください。会話の内容は“食べ物の好き嫌いについて”です。この話題からそれないように十分に注意してください。」と伝え, 実験者は退室した。ビデオには, 2名の被験者の上半身が同一画面に入るように会話の様子が撮影された。2人の距離は大坊(1982)を参考に, 120cmとした。

4. 15分後, 実験者が入室し, 被験者に会話をやめさせた。被験者は互いに姿の見えない場所へ移動し, 好悪感情の操作の有効性を確認するための質問調査票に回答した。2名の被験者が回答を終了した時点で実験は終了した。

全体を通して, 約30分の実験であった。

好悪感情の操作の有効性の確認

会話セッション終了後, 会話相手に対する印象操作直後の好意, および会話終了後の好意を, 被験者が7段階で評定した。

従属測度

発言行動の指標として, 以下の測度を用いた。また, 会話セッション15分間を, 会話開始から経過時間3分ごとの5ブロックに分割し, 1ブロックあたりの各測度を算出した。

ペア単位での指標 ①2者のうち一方のみが発言している単独発言, ②2者が同時に発言している同時発言, および③2者が同時に沈黙している同時沈黙についてそれぞれ, 出現頻度, 時間, および1回あたりの平均時間を測定した。

なお, 発言頻度については, 話者の交代をもって1とするが, 同時沈黙が起き, その前後が同一者の発言である場合, 文としてのつながりをもって1とし, これに当てはまらない場合は2とした。

個人単位での指標 各被験者の発言について, 発言頻度, 発言時間, および1回あたりの平均時間を測定した。

なお, これらの従属測度は, 実験中に録画したビデオテープを再生しながら測定した。

結 果

好悪感情の操作の有効性の検討

会話セッション前後の会話相手に対する好意の平均値を, 提示された会話相手からの第一印象別に示したのが表1である。

表1
会話相手への好意

提示された第一印象	好悪感情操作直後	会話後
肯定的	6.13 (0.34)	6.73 (0.57)
否定的	3.33 (1.00)	4.07 (0.87)

各セル $n=15$ () :SD

好悪感情の操作の有効性を検討するため, 好悪感情の操作(肯定的・否定的)×好意評定の時期(好悪感情操作直後・会話後)を独立変数, 好悪感情操作直後および会話後の相手への好意を従属変数として分散分析を行った。その結果, 好悪感情の操作の主効果が有意であり($F(1, 28) = 15.94, p < .01$), 会話相手からの肯定的な第一印象を提示された者は, 否定的な第一印象を提示された者よりも, 会話相手に対する好意が有意に高かった。好意評定の時期の主効果, および好悪感情の操作と好意評定の時期との交互作用に有意性は認められなかった。

以上の結果から, 会話相手からの第一印象として肯定的評定を提示された被験者は, 会話相手に好意的感情をもち, 否定的評定を提示された被験者は, 会話相手に非好意的感情をもったと言える。

測定一致率

被験者の中から無作為に2名を選び出し、2名の測定者が各測度を測定した。測定者間の一致率（評定の一致時間／相互作用時間）が98.8%と非常に高かったため、その後は実験者が1名で測定を行った。

ペア単位での分析

2者の好悪感情の組み合わせによる各ペアの発言行動の差異を検討するため、2者の好悪感情の組み合わせ（好意－好意・好意－非好意・非好意－非好意）×経過時間（ブロック1～5）を独立変数、各測度を従属変数として分散分析を行った。なお、従属変数のうち時間量に関しては、対数変換を施した上で分析を行った。

単独発言 条件および経過時間ごとに、単独発言の頻度、時間、および1回あたりの平均時間の平均値を示したのが図1～3である。

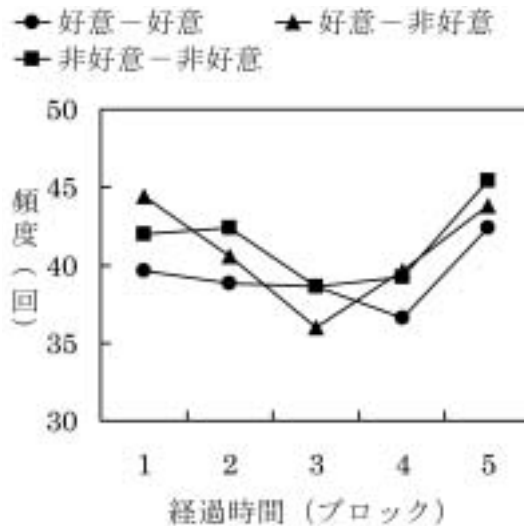


図1 2者による単独発言の頻度

単独発言の頻度については、経過時間の主効果が有意であった ($F(4, 48) = 3.31, p < .05$)。下位検定を行った結果、ブロック3よりもブロック5において単独発言の頻度が有意に多かった ($p < .05$)。

単独発言の時間については、2者の好悪感情の組み合わせの主効果に傾向が認められた。 ($F(2, 12) = 3.19, p < .10$)。下位検定を行った結果、好意－好意条件では、好意－非好意条件よりも単独発言時間が長い傾向にあった ($p < .10$)。

2者の対面的コミュニケーションにおいて好悪感情が発言行動に及ぼす影響

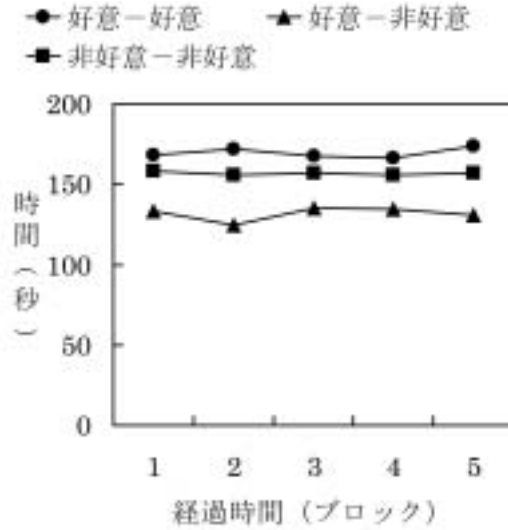


図2 2者による単独発言の時間

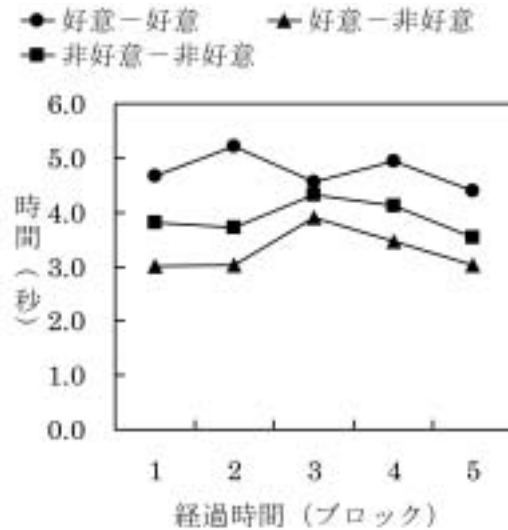


図3 2者による単独発言1回あたりの平均時間

単独発言1回あたりの平均時間については、2者の好悪感情の組み合わせの主効果に傾向が認められた ($F(2, 12) = 2.82, p < .10$)。下位検定を行った結果、好意-好意条件では、好意-非好意条件よりも単独発言1回あたりの平均時間が長い傾向にあった ($p < .10$)。

以上の結果から、単独発言は会話の終盤に多く行われたと言える。また、好意-好意条件では、単独発言1回あたりの時間が長かったため単独発言の総時間が長かったと言える。

同時発言 条件および経過時間ごとに、同時発言の頻度、時間、および1回あたりの平均時間を示したのが図4～6である。

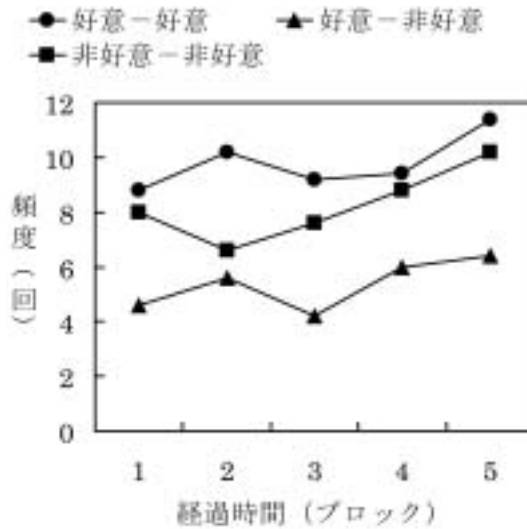


図4 2者による同時発言の頻度

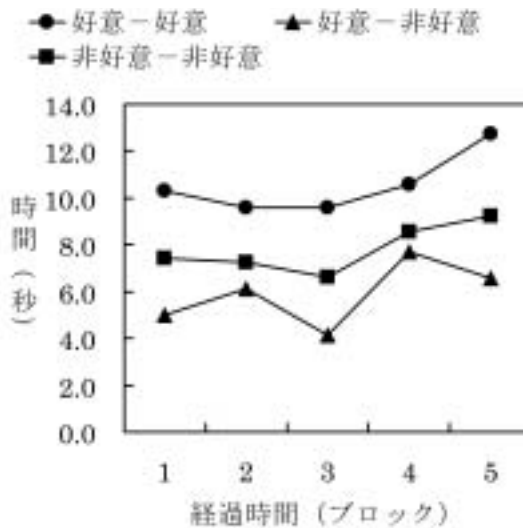


図5 2者による同時発言の時間

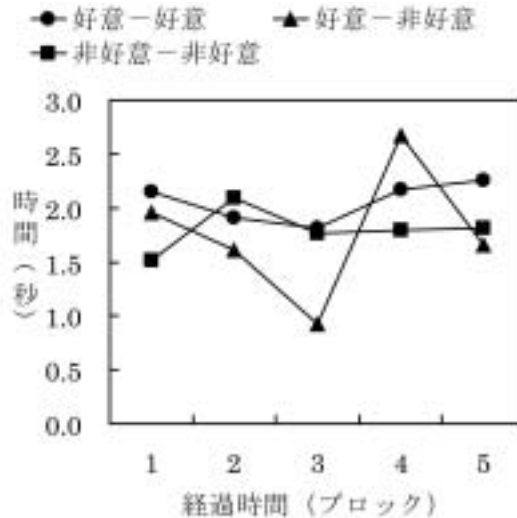


図6 2者による同時発言1回あたりの平均時間

同時発言の頻度については、経過時間の主効果に傾向が認められた ($F(4, 48) = 2.34, p < .10$)。下位検定の結果、ブロック3よりもブロック5の方が同時発言の頻度が多い傾向にあった ($p < .10$)。

同時発言の時間については、経過時間の主効果が有意であった ($F(4, 48) = 2.70, p < .05$)。下位検定の結果、ブロック3よりもブロック5において、同時発言の時間が有意に長かった ($p < .05$)。

同時発言1回あたりの平均時間については、2者の好悪感情の組み合わせと経過時間との交互作用に傾向が認められた ($F(8, 48) = 1.84, p < .10$)。下位検定の結果、ブロック3における2者の好悪感情の組み合わせによる単純主効果に傾向が認められ ($F(2, 60) = 2.53, p < .10$)、好意-好意条件では、好意-非好意条件よりも同時発言1回あたりの平均時間が長い傾向にあった ($p < .10$)。また、好意-非好意条件における経過時間の単純主効果に傾向が認められた。 ($F(4, 48) = 4.55, p < .10$)。下位検定の結果、ブロック3よりもブロック1、ブロック2、ブロック4、およびブロック5において、同時発言1回あたりの平均時間が長い傾向にあった ($p < .10, p < .10, p < .10, p < .10$)。

以上の結果から、同時発言は会話の終盤に多く行われたと言える。また、好意-非好意条件では、会話の中盤に同時発言1回あたりの時間が短かったため、同時発言の総時間が短かったと言える。

同時沈黙 条件および経過時間ごとに、同時沈黙の頻度、時間、および1回あたりの平均時間の平均値を示したのが図7～9である。

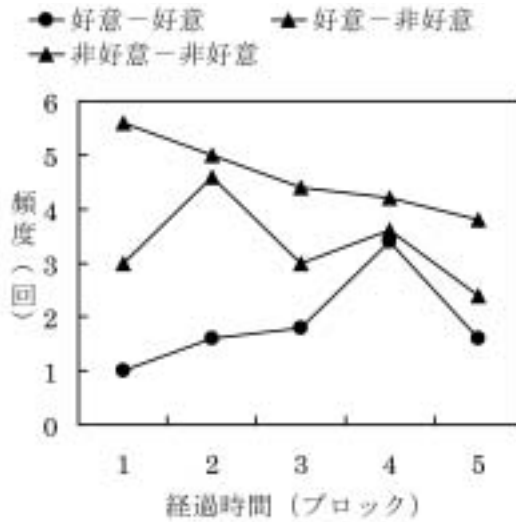


図7 2者による同時沈黙の頻度

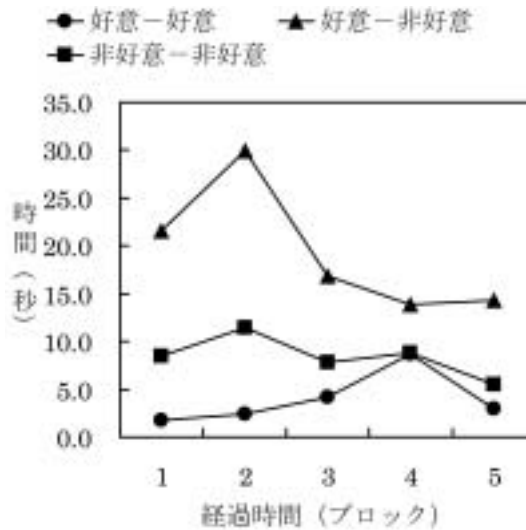


図8 2者による同時沈黙の時間

同時沈黙の頻度については、2者の好悪感情の組み合わせによる主効果に傾向が認められた ($F(2, 12) = 3.11, p < .10$)。下位検定の結果、好意-好意条件よりも好意-非好意条件で、同時沈黙の頻度が多い傾向にあった ($p < .10$)。

同時沈黙の時間については、2者の好悪感情の組み合わせによる主効果が有意であった (F

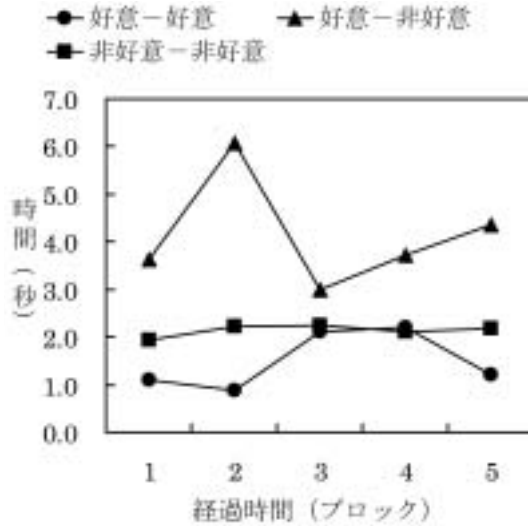


図9 2者による同時沈黙1回あたりの平均時間

(2, 12) = 6.01, $p < .05$)。下位検定の結果, 好意-好意条件よりも好意-非好意条件で, 同時沈黙の時間が有意に長かった ($p < .05$)。

同時沈黙1回あたりの平均時間については, 2者の好悪感情の組み合わせの主効果が有意であった ($F(2, 12) = 7.13, p < .01$)。下位検定の結果, 好意-好意条件よりも好意-非好意条件で, 同時沈黙1回あたりの平均時間が有意に長かった ($p < .05$)。また, 好意-非好意条件の方が非好意-非好意条件よりも同時沈黙1回あたりの平均時間が長い傾向にあった ($p < .10$)。

以上の結果から, 好意-非好意条件では同時沈黙の頻度が多く, また, 同時沈黙1回あたりの時間が長かったため, 同時沈黙の総時間が長かったと言える。

個人単位での分析

2者の好悪感情の組み合わせによる各個人の発言行動の差異を検討するため, 被験者1の被験者2に対する好悪感情(好意・非好意), 被験者2の被験者1に対する好悪感情(好意・非好意), および経過時間(ブロック1~5)を独立変数, 各測度を従属変数として分散分析を行った。なお, 従属変数のうち時間量に関しては, 対数変換を施した上で分析を行った。

発言頻度, 発言時間, および発言1回あたりの平均時間 条件および経過時間ごとに, 発言の頻度, 時間, および発言1回あたりの平均時間の平均値を示したのが図10~12である。

発言の頻度については, 経過時間の主効果が有意であった ($F(4, 104) = 5.36, p < .01$)。下位検定の結果, ブロック5がブロック3およびブロック4よりも発言の頻度が有意に多く ($p < .05, p < .05$), またブロック1がブロック3よりも発言の頻度が有意に多かった ($p < .05$)。

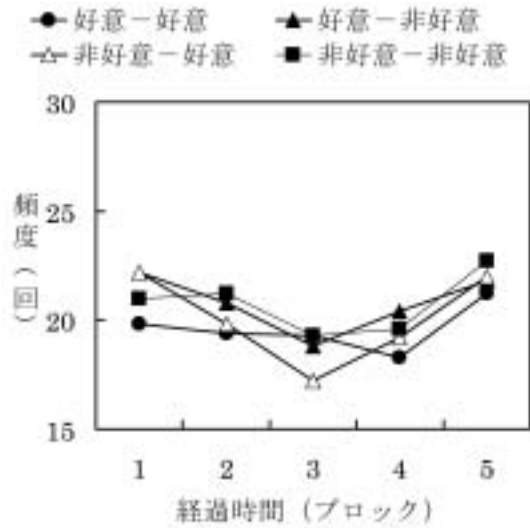


図10 個人による発言の頻度

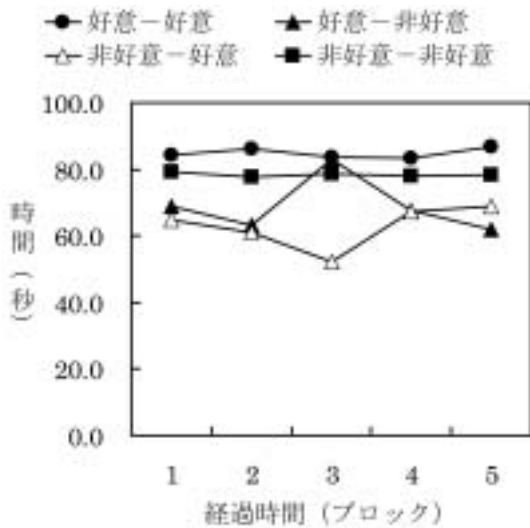


図11 個人による発言の時間

発言の時間については、被験者1の被験者2に対する好悪感情と経過時間との交互作用に傾向が認められた ($F(4, 104) = 2.38, p < .10$)。下位検定の結果、ブロック3において、被験者1の被験者2に対する好悪感情の単純主効果に傾向が認められ ($F(1, 130) = 3.47, p < .10$)、被験者1が被験者2に対して好意的感情をもっている場合は、非好意的感情をもっている場合より

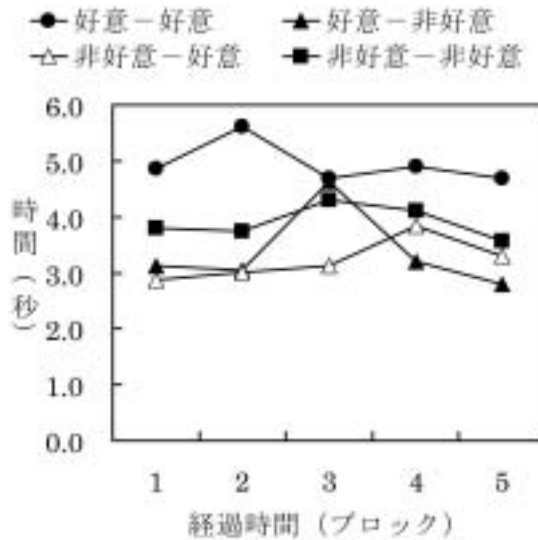


図12 個人による発言1回あたりの平均時間

も発言時間が長い傾向にあった ($p < .10$)。また、被験者2の被験者1に対する好悪感情の単純主効果に傾向が認められ ($F(1, 130) = 3.44, p < .10$)、被験者2が被験者1に対して好意的感情をもっている場合は、非好意的感情をもっている場合よりも発言時間が短い傾向にあった ($p < .10$)。

発言1回あたりの平均時間については、被験者1の被験者2に対する好悪感情と経過時間との交互作用に傾向が認められた ($F(4, 104) = 2.94, p < .10$)。下位検定の結果、ブロック3において、被験者1の被験者2に対する好悪感情の単純主効果に傾向が認められ ($F(1, 130) = 3.46, p < .10$)、被験者1が被験者2に対して好意的感情をもっている場合は、非好意的感情をもっている場合よりも発言1回あたりの平均時間が長い傾向にあった ($p < .10$)。また、被験者2の被験者1に対する好悪感情の単純主効果に傾向が認められ ($F(1, 130) = 3.43, p < .10$)、被験者2が被験者1に対して好意的感情をもっている場合は、非好意的感情をもっている場合よりも発言1回あたりの平均時間が長い傾向にあった ($p < .10$)。

以上の結果から、個人の発言は会話の序盤と終盤に多く行われたと言える。また、会話相手に好意的感情をもつ被験者は、発言1回あたりの平均時間が長かったため発言の総時間が長かったと言える。

考 察

本研究は、2者による対面的な会話場面を設定し、2者間の好悪感情を操作した上で、2者間の好悪感情の相異によって発言行動およびその推移過程に差異が見られるか、すなわち、2者間の好悪感情が発言行動に及ぼす影響を検討したものである。

2者間の好悪感情による発言行動の差異

互いに好意的感情をもつ2者の会話において、単独発言の時間は一貫して長かった。また、発言行動の積極性を示す同時発言の時間も長かった。さらに、発言行動の消極性を示す同時沈黙の頻度は少なく、その時間も短かった。以上のことから、互いに好意的感情をもつ2者の会話では発言行動が活発であったと言える。

互いに非好意的感情をもつ2者の会話においては、統計的に有意でなかったものの、互いに好意的感情をもつ2者より単独発言および同時発言は少なく、同時沈黙は多かった。しかし、それらの推移は互いに好意的感情をもつ2者の会話と同様の傾向が見られた。

一方が好意的感情をもち他方が非好意的感情をもつ2者の会話においては、単独発言の時間は一貫して短かった。また、発言行動の積極性を示す同時発言の時間も短かった。さらに、発言行動の消極性を示す同時沈黙の頻度は多く、その時間も長かった。会話の中盤には、会話相手に好意的感情をもつ者の発言時間は増加していたが、逆に非好意的感情をもつ者の発言時間は減少していた。しかし、両者の発言時間は会話の終盤には元の水準に戻っていた。以上のことから、一方が好意的感情をもち他方が非好意的感情をもつ2者の会話では発言行動が抑制されたと言える。

これらの結果は、2者間のコミュニケーション過程において、互いに好意的感情をもつ2者の発言行動が活発であるという点で、仮説の1部を支持している。しかし、一方が好意的感情をもち他方が非好意的感情をもつ2者の発言行動と、互いが非好意的感情をもつ2者の発言行動とは、統計的には有意でなかったが予想していたものとは逆の結果となった。

発言行動に及ぼす好悪感情の影響

会話相手に好意的感情をもつ者は発言時間が長かった。好意的感情は発言行動を活性化する効果がある(大坊, 1986; 大坊1990)。また、非言語的コミュニケーションは対人魅力の結果として生じるとともに原因ともなり、好意的感情が発言行動に影響を及ぼす一方で、2者関係においては発言行動が好意的感情を高める働きをもつ(大坊, 1986)。そのため、互いに好意的感情をもつ2者の会話における発言行動の活発さが会話相手に対する好意的感情をさらに高め、その結果、発言行動の活発さを持続させたと考えられる。しかし、一方が好意的感情をもち他

方が非好意的感情をもった2者の会話では、非好意的な感情もつ者の発言行動が不活発なため、好意的な感情をもつ者の発言行動も抑制され、全体として発言行動が不活発になったと考えられる。

互いに非好意的感情をもつ2者の発言行動が、一方が好意的感情をもち他方が非好意的感情をもつ2者の発言行動よりも活発であった理由としては、以下のことが考えられる。

まず、緊張緩和のためのコミュニケーションが行われたのではないだろうか。そもそもコミュニケーションは個人の間を生じる緊張を緩和するために行われる (Newcomb, Turner, & Converse, 1965)。また、沈黙は最も否定的に認知され、特に最大の緊張を生じさせる2者の沈黙は好まれない (大坊, 1990)。このことから、互いに非好意的感情をもった2者の会話では、沈黙によるムードの悪化を防ぎ、緊張を緩和させるために発言行動が活発になったと考えられる。

次に、一方が好意的感情をもち他方が非好意的感情をもった2者の、好悪感情についての認知の不一致が発言行動の不活発化を招いたのではないだろうか。パーソナリティの相異が不均衡を生じさせ、話題への関与の低さをもたらすと報告 (大坊・杉山・吉村, 1975) がある。このことから、好悪感情の認知の不一致においても同様の現象が生起したと考えられる。

また、本研究では好悪感情の操作の際に、会話相手からの偽りの第一印象を提示した。非好意的感情をもたせる場合は、第一印象の評定を低く設定して「相手に良い印象をもたれていない」ことを知らせる形で好悪感情の操作を行った。そのため、自己評価を高めたいという動機づけが互いに非好意的感情をもった両者に働き、発言行動が活性化されたと考えられる。

本研究では、各条件5ペアずつを被験者としたが、各指標にはばらつきが見られた。今後は被験者数を増やし、一般性を高める必要がある。また、発言行動については不安や社会的外向性との有意な関係が認められている (大坊, 1982) ことから、個人特性も考慮に入れ、好悪感情と発言行動との関連を検討する必要がある。さらに、本研究では、発言行動のみを扱い、その他の非言語的コミュニケーション行動や、どのような会話が行われたかについては分析を行っていない。実際には、2者間の好悪感情は発言行動のみならず、その他の非言語的コミュニケーション、および会話内容にも影響を及ぼしていると考えられる。従って、今後は好悪感情とコミュニケーション行動全体との関連について検討する必要がある。

注

- 1) 本論文は、黒川光流指導のもとで若林美江が執筆した平成14年度富山大学人文学部卒業論文を加筆・修正したものである。

引用文献

- Byrne, D. 1971 *The attraction paradigm*. New York: Wiley.
- 大坊郁夫 1977 話題の重要度評定とその因子構造 札幌医科大学医学進学課程紀要, 18, 1-12.
- 大坊郁夫 1982 二者間相互作用における発言と視線パターンの時系列的構造 実験社会心理学研究, 22, 11-26.
- 大坊郁夫 1985 発言, 視線行動に及ぼす対人魅力情報の効果 日本グループ・ダイナミックス学会第33回大会発表論文集 15-16.
- 大坊郁夫 1986 対人行動としてのコミュニケーション 対人行動学研究会(編) 対人行動の心理学 誠信書房 Pp. 193-224.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現: コミュニケーションに見る発展と崩壊 心理学評論, 33, 322-352.
- 大坊郁夫 1995 魅力と対人関係 安藤清志・大坊郁夫・池田謙一 現代心理学入門4 社会心理学 岩波書店 96-102.
- 大坊郁夫・杉村善郎・吉村知子 1975 二者間のコミュニケーションにおける不安の効果: 特に高低両極の不安水準の機能について 実験社会心理学研究, 15, 1-11.
- 飯塚雄一・福原省三 1988 非言語的コミュニケーション 小川一夫(編著) 暮らしの社会心理学 福村出版 Pp. 128-139.
- Kendon, A. 1972 The role of visible behavior in the organization of social interaction. In M. von Cranack & I. Vine(Eds.), *Movement and communication in man and chimpanzee*. New York: Academic Press. Pp. 29-74.
- マレービアン A. 西田司他(訳) 1986 非言語コミュニケーション 聖文社
- Newcomb, T. M., Turner, R. H. , & Converse, P. E. 1965 *Social psychology: The study of human interaction*. New York: Holt, Rinehart.
- Patterson, M. L. 1983 *Nonverbal behavior: A functional perspective*. New York: Springer-Verlag.
- Tesser, A., & Rosen, S. 1975 The reluctance to transmit bad news. In L. Berkowitz(Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 8, New York: Academic Press.
- 和田実 1988 二者間の好意, 対人距離および話題が非言語的行動に及ぼす影響 心理学研究 59, 45-52.
- 和田実 1996 非言語的コミュニケーション: 直接性からの検討 心理学評論, 39, 137-159.
- 和田実 1997 対人的相互作用 長田雅善(編) 対人関係の社会心理学 福村出版 Pp. 132-142.